

熊笹の原に風の道

重兼芳子



熊笹の原に風の道
重兼芳子



熊笹の原に風の道

定価一二〇〇円

昭和六十一年十二月五日初版印刷
昭和六十一年十二月十五月初版発行

著者 重兼芳子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三―四

©一九八六 検印廃止

ISBN 4-12-001544-0

熊笹の原に風の道

装帧
直江真砂

壁に埋めこんだ間接照明の光が二坪ほどの部屋全体を薄明るく照らしていた。部屋に敷きこんだ毛足の長い絨毯が、眼のさめるようなショッキングピンクなので、その色が照り映えて部屋の光はピンク色に充たされている。

廊下側の一方の壁に、ちょうど人の顔の大きさほどのマジックミラーがはめこんであって、廊下の一点に立ちそこからのぞくと、この部屋の様子が隅から隅まで見通すことのできる仕掛けになっていた。

しかし部屋の中からは、のぞいている男の顔も姿も見ることとはできない。部屋の中にいる女は、ただ一方的に見られているだけで見られていることさえ忘れれば、ただ一人で部屋の中で演技をしている。

マジックミラーの七十センチくらい下の壁に、人間の片手が入る程度の丸い穴が開いていて、そこは苺の模様のカーテンで仕切つてある。以前は部屋の中の女がそこに体を寄せれば、丸い穴から手を出して女の体を触ることができた。

もっとも体を触る場合は低い部分に開いている穴の前に、客は跪ひざまずかねばならず、それも二分間

と限定されているので、二分間女の体を触るだけで女は壁の前から離れてしまう。

その方法も風俗営業法が施行されてから取り締りがきびしくなり、もっぱらマジックミラーからのぞくだけで、女の体には触れないという、客にとっては欲求不満のつる方法の性商売が行われていた。

有子はそのぞき部屋で働いている女だ。

もともと有子の働く「雅びグループ」という性産業のチェーン店は、金もなく女にももてない貧しい独身者を主な客層にしていた。

ソープランドへ行くほどの金も持たず、下宿代と食費で労賃の大半は消えてしまう貧しい独身男に、気軽に金を使わせる方針だから、のぞき一度の料金は一度食費をきりつめればすむほどの低料金に押えてあった。その代り数をこなすことで利益を上げねばならなかった。

有子は午後から夕方まですでに十人の客にのぞかれていた。客から指一本体に触られるわけではなく、直接性交渉を行うわけでもない。

こちらから客の視線が見えるわけでもなく、有子はただ教えられた通りのふりつけで、一枚一枚着物を脱ぎ、一本一本帯や紐を解き、最後に赤い腰巻一枚になって前を見せそうで見せないそぶりをしていればよいのである。

しかし有子は着物を脱ぎながら、間接照明のやわらかい光の中に、有子の体を見ようとする客

の視線がサーチライトのように、まっすぐな光となって突き刺さってくるように感じる。

まして今日のように午後から夕方にかけて、十人もの客からみつめられるような日は、体中の精気が抜けてしまったような疲れとだるさで、ぐったりと絨毯の上に横たわっているのだった。裸の体に脱ぎ捨てた衣類をかけていた。夜の部まで休みになるので、早く起き上って冷たいビールを飲みたい。そう思いながら有子は今日の働きである黄色の丸いプレートを手の中でじゃらじゃらと鳴らしていた。

プレートには雅びグループのシンボルマークである下り藤が金で刻印されてあった。「雅びビル」には地下ののぞき部屋が三室、一階はすけすけユニホームのウエイトレスが酒を運ぶバブ、そして二階がおとなのおもちゃの売り場、三階から六階までが個室マッサージで、七階、八階は私たちの寝泊りする寮になっていた。

ビルの入口でのぞき部屋に用のある客は黄色のプレートを買った。地下の階段を下りてきて、下り藤の金色の刻印のあるプレートを下の穴から踊り子に手渡すと、そこで交渉は成立したということになる。

有子は今日受け取ったプレートの数を数えた。十一個あった。マジックミラーと反対側に控え室へ通ずるドアがあり、有子はそこからのろのろと控え室に入った。身仕度を直してプレートを両手でちゃらちゃらと音させながら地下から階段を登り、玄関に面している事務室に入った。

「マネージャー、今日はこれだけ、十一個だよ。よく稼いだでしょ、お金ちょうだい」

と手を出した。

「よく働いたねえ、夜の部も頼むよ、えーとプレートは十個だね、十個分つけとくよ。それから現金を持っけると同室の由佳につけこまれて借りられるから、ちゃんと貯金しといてあげる。もうずい分通帳に数字が並んだよ、ほら」

マネージャーは有子名義の通帳をひらひらと見せた。「最後の客が十人目で、そのあともう一人来たから十一人のような気がするけど」、有子が口の中でつぶやくと、「プレートの数は十個なんだから十人分にまちがいないよ」とマネージャーは言った。

有子は気に入らないときの癖で小鼻にしわを寄せた。十一人分の接客をして十人分の賃金しかもらえないのは全く不当なことだ、しかし有子の頭の中では数字がはっきりとした具象となって浮んでこない。「十一人のような気がするけれど」というところで退くしかないのだ。

事務室の奥で有子と同じ部屋に寝泊りし、衣裳の着け方脱ぎ方、そして振りつけまですべてを教えてくれるしのぶが、マネージャーと相談をしている。

「スペシャルというのを上乘せしなければ数だけではこなせないわ。前は女の体を触らせて風営法にひっかかったんだから、男の体をこちらで触って金を上乘せするって方法にしようよ。ソーブランドにはかないっこないんだから、その半値で楽しませるのよ」

しのぶは有子を大切にした。最初にここに来たときから、しろうとの有子の手を取り足を取りしながら客の前に出せるだけの仕込みをしてくれたのだ。

「プレートの色をスペシャルは赤にして、赤を買ってくれた客には前を開けさせて、下の穴からそこを出させ、女の手で触らせる。そのくらいのサービスは警察でも見逃すよ、そうしなければ低賃金層の性犯罪が殖える。ここにくる男は女にもてないんだから」

しのぶは有子がいることに気がつく、話を打ち切って「上へあがる」と人差指を立てた。エレベーターでしのぶと七階へ上り、四畳半にキッチン、シャワーのついた寮室に戻ると、同室の由佳がすでに帰っていた。ビルの最上階とその次の階を寮室にすると、その部屋は商売に使えないことになる。

しかしこのあたりの商売は過当競争で、目ぼしい女は常に他の店からひき抜かれることになる、ひきぬきを防止しなければならない。エレベーターの上下だけで居室と仕事場がつながっていると監視の眼は届く。経営者はビルの最上階部分を女たちの居室に使う方がよいと判断しているのだらう。

有子はエレベーターを上り下りするだけで仕事をし、ビルの外へ一步も出ないという毎日が続く。息が詰まりそうになる。食事は電話一本でこのあたりの飲食街から取り寄せれば、すぐに前に応じてくれるのだ。

「いくら家賃が要らないからって、毎日出前のものばかりじゃ、飽きるわ。あたしなんかお客さんと適当に遊んで、おごらせちゃうからおいしいもの食べてるけど」

「あたし今日、十一人だったような気がするのよ」

有子は自分の指を前に大きく掲げ、投げ出して足の拇指を一本立てて見せた。

「あたしからマネージャーに言っとくからね。それより有子はまだ夜の部のふりつけすっかり覚えてないだろ、今夜はインドのサリーを着るんだよ、出前を食べたら稽古に入るからね」

しのぶは少し頭の弱い有子を上手に使った。三人とも冷し中華の出前を頼んだ。由佳は寝ころんでまんがを見ていた。しのぶはのぞき部屋を任されているので、BGMにも衣裳にも新しい工夫を考え出さねばならなかった。

何度も通ってくる客を飽きさせないためにアラビアの女の黒い衣裳を考えたり、腰元や御殿女中の衣裳をそれ専門の古着屋から取り寄せたりした。

その上マネージャーと相談したように、新しいスペシャルの方法を有子に仕込まなければならぬ。由佳は言葉だけですぐに理解できたが、有子は実際に手を取って何度も同じことをくり返さなければ、客の前には出せないのだった。

冷し中華の出前が届いて、有子は掌の上にマネージャーからもらっただけの現金を掲げた。千円札が二枚と百円玉が五個あった。

「この中から冷し中華のお金を取ってね。それに、あたし、ビールも飲みたい。お金のこと分らないから」

と言った。買物をするときは掌の上にありったけの金をのせて、その中から必要な分を取ってもらう習慣になっていた。店員からこれだけでは品物を買えないと言われれば、品物を買うのをあきらめて帰るだけだ。

「えーっと特上だから六百円、それにビール四百円、前に貸しといたから千五百円もらうから」由佳がそう言つて有子の掌の上から札をつまみかけると、しのぶが由佳の手をびしやりと叩いた。「これ一枚ですむのよ」と言いながら千円札を一枚つまみ取ると、あとは大切にしまいなさいと有子にそう言つた。

「夕食がすんだら有子ちゃんに教えることがあるの、あんたは素直だからすぐに覚えるよ。由佳、スペシャル知ってるね、前の店でやったことあるものね。有子にスペシャルのやり方を今から教えるのだ」

しのぶは火災のときのために常備している懐中電灯を持ってきた。ワセリン、ティッシュペーパー、ガーゼのタオルなども有子の前に持ち出した。

「いいかい、うちに来るお客さんは女の人にもてないの。女にもてないからとてもさみしくてかわいそうなの。かわいそうな人を慰さめてあげるのはいいいことなんだよ。その方法を今から教え

てあげるからね」

しのぶは懐中電灯をこちら側に突き出すようにして固定させた。

「赤いプレートを持ったお客さんには、このサービスをするのよ」

そう言いながら懐中電灯にワセリンを塗り、たくみに両指を使いながら何度もしごいた。しごく端からガーゼのタオルを先端に当てた。

「終りになると様子見てると分るから、タオルをこうやるんだよ、それからティッシュペーパーでいいねいに拭いてあげて、スペシャルは終り、やってごらん」

有子はしのぶに言われるままに何度も懐中電灯で練習した。

「あたし子供の頃、母牛の乳房をしごくのが上手だったの。だから同じようなことなんだ、しのぶねえさんの言うとおりに、スペシャルをやるよ、プレート受け取る穴から男の人が出すんですよ。あたしうちの牡馬のも見てたし、おとうちゃんのも見てたし……」

由佳に指名がついて、すぐに下に降りて行った。夜、由佳を指名してくる客は何人もいた。三人の中では由佳が最も人気が高く、夜の稼ぎ盛りの時間、しのぶも有子も指名がめっきり減っていた。

「うちは小さな八百屋なんだよ。それもスーパーに押されて先細りさ。場所がいいからあたしが一生懸命資金を稼いで、それをもとにスーパーに建て替えるんだ。一階と二階は店、三階に家族

が住んで四階はにいちやんの世帯が住む。四階建てのビル建てて経営をちゃんとやって……。有子だってこんなところで働くんだもの、遊びじゃないよね。親はなにしてるの。ここの弱い子を働かせてさあ」

しのぶは指先で自分の頭を指した。有子は遠くを見る眼つきをして、自分がどうしてここの店に来るようになったのかを考えようとした。

順序が逆になったり子供の頃のことがつい今しがたのような気がしたり、浮んでくる一つ一つの事柄に、どうしても一本の筋道を立てることができなかった。

その夜は有子にもしのぶにも指名の客はなく、由佳一人が深夜近くまで稼いだ。

2

「有子は一人ぼっちじゃないんだろ、家族はどうしているの」

並べて敷いた布団に横たわってしのぶが聞いた。有子は枕の下に入れてある布製の小さなバッグを手で探った。指の先になじみの布の感触が当たると、母と手をつないでいるような深い安堵を覚えた。

布製のバッグにはアップリケがしてあった。赤いトタン屋根の家、そこへ続く一本の道、傍に

大きなポプラの樹。母が自分の家を模して丹念にアップリケした図柄だ。

「この中に家に帰るまでの地図と、帰れるだけのお金と、住所と、おとうさんとおかあさんの名前と、みんな書いてあるのを入れとくから。このバッグの模様を見て家に帰りたくなったら先生に言うのよ」

母は何度も有子に言い聞かせた。そして着物の袖を眼に当てて涙を拭いた。

小学校の三年生の二期が済んだ頃、通学していた学校の校長と教育委員が有子の家を訪ねてきて、四年生からは養護学校へ入るようにとすすめた。

このまま普通学級にいてお客さま扱いされるよりも、ここから距離は遠いが養護学校へ入り附属の寮に寝泊りして、日常生活から学習まで専門家の手に任せた方がよい、と両親にすすめた。

北海道の石狩山地の南西、北海道の分水嶺の広大な裾野が広がるあたりで有子は生れた。両親は小さな牧場を経営していて有子はその一人娘として育った。小学校の一年生に上ったとき、担任の先生が首を傾^{かし}げて、

「有子ちゃんは気だてはとてもいいし、こちらの言うことはよく理解できるのですが、他の生徒とかなり違いますね」

と両親に話した。両親は有子と他の子供と較べたことは一度もなかった。隣家まで五キロもある大自然の中にある牧場だ。家の周囲には唐松の林が拡がり、エゾムラサキやシャクナゲの花が

咲き競い、木立ちの向うに牛舎があった。

有子の友達は無数にいても、それは遠い隣家の子供ではなく、朝早くボプラの木のとっぺんで啼くカッコウや、ギアアギアアと無遠慮に啼き叫ぶカケス、そして夕焼けがはじまると巢の方へ帰ってゆく鳥などだった。カッコウにもカケスにも鳥にも、有子は人間と同じように話しかけ同じように仲好しだった。

牛の乳しぼりも有子の手にかかるのと両親がしぼるよりも出がよいのだった。有子は牛も自分と同じ生きもので、ただ姿が違うだけだと思いこんでいた。

両親にしても周囲に他の子供のいない環境の中で、どのような子が人なみでどのような子が人なみでないのか見当もつかない。

三年生になって有子と他の生徒との差が大きくなり、養護学校への転校をすすめられても、両親にとって有子は困った子でもおかしな子でもなく、成績という学校がつくる基準さえなければ、牧場にとって大切な働き手であり両親の希望の星でもあった。

時機を失すれば有子の将来のためにならないと、養護学校への転校を強くすすめられた両親は、このまま学校をやめさせて両親のもとで育てようかとさえ思い詰めた。

牛の出産のときも有子は小さいながら立派な働き手で、敷藁を替え腹を撫でてやり母牛を落ち着かせる名人でもあった。

割りばしにしかないハンの木でさえ有子の手にかかる立派な巣箱になった。大人なら誰も手をつけない家具にもならないハンの木は春になるとオレンジ色の新芽を開く。有子は同じハンの木でつくった巣箱をハンの木の幹にかけてやる。

牧場の周囲に次々とかけてやる巣箱の中にホオジロ、ウグイス、ヤマバト、ムクドリ、シジュウカラなどが巣づくりをする。それらの小鳥も有子の友達であり、学校へ行かなくても不自由しないほどの生きものは、周囲に充ちていた。

しかし両親は自分たちの意見を押し通すことはできなかった。中学三年までの義務教育は国民に課せられた義務であり、それを拒むことはできないのだった。重度の障害ではないので小学校の四、五、六年の三年間を養護学校の教育を受け、中学からは地元の中学へ家庭から通学するようにと、教育委員が日参して両親を説得した。

三年生の春休みがすんで四年生になるとき、両親は有子の荷物と学習用具をまとめて自動車のトランクに積んだ。これから有子が住むのは若草寮という全寮制の寮で、道央の各地から障害児が集められていた。

母は眼を赤くしながら有子の肩から布製のバッグをかけた。斜めにかけてたバッグには有子の家と同じような家が、かわいくアップリケされていた。そして帰りたくなったら他の荷物は全部捨ててもいいから、このバッグだけを肩からかけて、家に帰っておいでと何度も言い聞かせた。